大手前大学論集　第12号（2011）pp.245－252

能の現代的な解釈を求めて

浜　津　　守

要　旨

能の演目にもなっている「求塚」は生田川と生田森の付近に伝わる。

民話や謡曲にもなり、やがて傀儡師たちによって民間伝承もされてきた。

近代では人形アニメーションによって脚色されている。

能の様式の美しさは総合芸術として、英国詩人や映画監督など、広く世界へ紹介され、現代文学や仮面演劇へも影響をあたえた。

スペースシャトルに搭乗した宇宙飛行士も船外活動では、視野の狭い中、四方に柱が立つ小さな舞台で滑らかに舞う能の動きを参考にしている。

それら能の現代的な解釈を求めて、独特の形式と伝承を読み解く。

キーワード：ケルト民話、詩劇、謡曲、能楽

エズラ・パウンドの能の翻訳に英国詩人イェイツは、ケルト民族に伝えられた民話との相似を見いだしていた。その極限までに様式化された、能の深遠なる世界に震撼し、大きな衝撃を受けている。大いなる創造の刺激をうけて劇作『鷹の井戸』（At the hawk's well, 1921）はじめ、能の影響を濃厚に示す一連の詩劇を創作した。

能という様式劇は美しいが、他国の言語に翻訳するのは困難である。正確な言葉のみの変換ではなく、能の心を移しかえて表わさなければならない。しかし能の幽玄な物語を読取って、イェイツに能を知らしめたパウンドは、アメリカ人にもかかわらず二十世紀初頭のロンドンやパリのリトルマガジンと詩のモダニズム運動の中心人物で、まだ無名であったＴ・Ｓ・エリオットやジェイムズ・ジョイスに大きな影響を与えてもいる。

東洋美術研究家アーネスト・フェノロサの遺稿をもとに、能の英訳集『能―日本古典演劇の研究』Noh, or Accomplishment, A Study of the Classical Stage of Japanをパウンド

が1916年に出版して、日本の能をすぐれた『文学』として、はじめて広く西洋に紹介した。

詩的な考えを通じて能を、自分たちの精神や国の土壌の中へ定着させて、新しい組織の中で芽を出した詩人エズラ・パウンドは、さらに能独特の形式と古いケルトの伝承を源とする物語との融合を試みた。

1916年にロンドンで見たワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』の公演では、能の訳集『錦木』『須磨源氏』『通小町』などに取り組んでいた時期であった。その序文にパウンドは、能の個々の作品はギリシャ劇と似て、広く知られている過去の物語や伝説を踏まえていることと「生における最も劇的で重大な瞬間」がそこに描かれていることを指摘している。

パウンドの劇作『トリスタン』は、死の視点から生の時間が回想されて、原典とする物語と著しい違いを見せている。ベディエの『トリスタン・イズー物語』など恋物語を題材とした一連の作品は、現在進行する時間軸によって展開して二人の死をもって完結する。パウンドの『トリスタン』は遡行する能の時間構造によって物語を再構成している。永久に満たされない幽玄な恋の想いが浮き彫りにされて、原典にはない旋律により「夢幻劇」として再生されている。主調音は生の儚さという旋律で世阿弥『定家』などの能の世界と相通じるもの。夢幻能の手法を取り入れることによって、パウンドは新たな生のヴィジョンを劇作品のなかに描いた。 能は総合芸術で言霊の芸術である。そこへ魅了された夢幻能は洋の東西今昔を縦横無尽に駆け巡った。

日本の文学に憑かれたパウンドは後年になって、谷崎潤一郎や三島由紀夫といった近代日本語で書かれた小説を美しく翻訳している。日本語による美学を三島由紀夫は、近代演劇にも活かそうと試みた。謡曲に親しんでいた三島は、能楽の自由な空間と時間の処理方法に着目していた。『近代能楽集』として「邯鄲」「綾の鼓」「卒塔婆小町」「葵上」「班女」「道成寺」「熊野」「弱法師」の八編からなる戯曲を、昭和25年から昭和35年にかけて雑誌『新潮』『声』などに発表した。それらは戦後日本を舞台とした現代劇へ置き換えて、能に描かれていたドラマを甦らせている。この現代戯曲は全て能の謡曲を原作とした翻案作品で、能の物語を世界に紹介したということで評価されていい果敢な実験であった。形而上学的主題を現代的な状況の中に再現した『近代能楽集』は、ドナルド・キーンが指摘しているようにギリシャ古典劇にも通じる普遍性のために、現在も海外でも上演されている。

□　「近代能」という言葉に始めて出会うと、一種の矛盾を感じるに違いない。能といえば、ひどくのろくて、わけの分らないもので、「近代的」の反対語のような存在だと一般に考えられているようだが、勿論、これは正しい見方だと思われない。現在の上演法はともかく、読み物として能を考えてみると、あらゆる演劇の中で一番出来た時代の束縛を受けないのは能ではないかと思うほどである。…能とギリシア古典劇は共通点が多いとよく言われている。仮面劇であって、役者が歌ったったりすることはたしかに共通だし、地謡に符合する合唱隊などもそうだが、一番似通ってる点は、その永遠のテーマであろう。…三島氏ほど想像力の豊富な作家がどうして中世の戯曲をわざわざ現代化しなけれはならなかったか、という疑問が起るかも知れない。…昔からあった物語を新しい形式で述べることほ古典主義者の立場であり、三島氏は明かに古典派である。ギリシアの戯曲や室町時代の能を現代化するのは、種がないからではなく、古典文学の名にふさわしく型に入って自分の手腕を発揮したいからだった。□
『近代能楽集』解説ドナルド・キーンより

□　「この世の終わりの景色」は、俊徳にとって官能を呼び覚ます愛しい記憶でもある。だから、俊徳にとって形あるものとは、この紅蓮の炎でしかなく、阿鼻叫喚の声こそが人間の真率な声であり、俗悪の代表である両夫妻の言葉なぞまがい物でしかない。

「あなたもこの世の終わりの景色を見たでしょう？」ということへ級子は「いいえ」と否定する。俊徳は思いがけない拒絶にあう「君は僕から奪おうとしているんだね。この世の終わりの景色を」しかし級子はそれをも毅然と受けながす「そうですわ、それが私の役目なんです」それがなくては生きていけない盲目者から承知で「この世の終わりの景色」を奪い取る級子に、次第に敗北していくのだった。
（級子微笑して去る。明るい部屋に、俊徳一人ぽつねんと残っている）□
『近代能楽集』「弱法師」より

「弱法師」最後の台詞は作者である三島由紀夫が、市ヶ谷駐屯基地で自決する舞台でも語られた言葉であった。数年前に上演された『近代能楽集』では、作者最後の言葉として合わせ重なるように意識的に演出された。すでに「能の物語を現代の物語とした」時点で、それらの確信的な演出が起動されていたといってもいいだろう。

能という霊界と現世における舞台装置を、阪神大震災や同時テロ爆破や石油流出などの災害事件事故現場などへ、舞台更新しても「能の物語を現代の物語」として可能だと、ドラマとして普遍な主題を掘り下げ物語再構築の強化作業を「近代能」としてやりとげているのであった。読み解くたびに『近代能楽集』は恐るべく構成を、古典ドラマから抜き取っている。形を変えても髄を普遍として残した、物語の極意まさに震撼の書とい

える。

謡曲「弱法師」は中上健次によっても、現代小説として描かれている。彼のエッセイに、短編小説と能について書かれたものがあった。説経節から能や謡曲が出来たわけではないけれども物語は、時として語り部へ憑依することもなりえる。物語をつくる人間たちからすれば、目から鱗が落ちるようなことを、ひときわ異彩を放つ作家は次のように語っている。

□　謡曲全集が時に短篇小説全集に見える事がある。短篇小説を書こうとする時、きまってそれらの本を、無意識のうちにひっくり返し読み直している。古い本を読むのは物を書こうとしている自分をいわば催眠状態に導く為の一等気に入った儀式のようなものだが、これも無意識のまま観阿弥や世阿弥の創った能が持ってしまった秘密を、ただ物が憑いたように二十枚の短篇小説を七、八時間で書きあげてしまおうとしているシャーマンのようになった私が、感知しての事かもしれないと、今、思うのである。□
中上健次【短編小説としての能】より

紀州熊野を舞台にした連作短編は、時に古典調となり現代の散文となる手法がとられている。「欣求」という小説は、説経節に出てくる熊野の湯へむかう「その男は、まさに弱法師と言ってよかった。よろよろと女に手をひかれて、ベンチから立ちあがった」見舞いがてら家族と帰郷して、ふたりに行く道をきかれ、一緒に行き先で一夜を過ごすという筋である。書きあげて気づいたのは、謡曲「弱法師」であったという。世阿弥とはまったく違う筋だが、「何の気なしにやってしまった事とは骨身にこたえる」という。そこで謡曲が説経から何を取り何を捨てて「物語の物語」をつくったのか問い詰めることになった。

〈浄土からのお湯でございます〉と湯場で弱法師と女に浸ったあと、酒を飲んで寝入ると女の呪文によって目覚める。〈有難うございました〉〈ごしょうでございます〉〈お救け下さりませ〉と裸ですり寄せて女は体をまさぐる。性による献身によって男を再生させる巫女のごとく。再生への秘儀として愉悦の声は呪文となる。その呪文にこめられた不思議な力は語り言葉の復活で、熊野という土地の霊と中上健次は交接してゆくのだった。

物が憑いたように短篇小説を書き上げた中上健次は、聖なるものとと俗性のなかで揺らぐシャーマニズムの力技によって『熊野集』へ繋がっていくのだった。その重要な

きっかけとなったのが能に描かれた世界であった。能が芸能とは違い独特なのは「物語の物語」をつくる作者が存在して群が集合してできた個の思想がある。能を考えるとシテやワキの登場の仕方が、短篇小説といわれるものの導入部に感じる気合いだと気づくこととなった。また中上健次の小説は自分なりの解釈で映像化したいと、映像作家に思わせる作品が多いことも指摘される。

■■人形アニメーションで表現された謡曲

人形アニメーションの第一人者・川本喜八郎によって、能の演目にもなっている「求塚」は生田川と生田森の付近の話が『火宅』という作品に脚色されている。

処女塚と西求女塚と東求女塚の古墳は、生田の地にまつわることが万葉集に詠われた。
「すみわびぬわが身投げてむ津の国の生田の川は名のみなりけり」
生田の川は生きるという名なのにそれは名ばかりのことだったのですね
わたしがここで命を落としてしまうのですから…
「いかばかり　深き心の　底を見て　生田の川に　身を沈めけん」

この逸話が世阿弥の父である観阿弥によって謡曲「求塚」にされた。

■川本喜八郎『火宅』1979年／19分

能「求塚」の物語を師・飯沢匡から聞いていた川本喜八郎は、前作『道成寺』で修得したテクニックを使えば、この作品を人形アニメーションで表現できると自信を得て、作品化に着手する。火や水や風の表現はより確かなものになり、平面の中で人形を動かしていた『道成寺』に比べ、より立体的な世界で人形を動かすことにも成功した。

風の中でヒロインが水晶の数珠をつまぐる演技は「人形に風を当てて撮影したのだろう」と浅く観ては、ひとコマずつの撮影で表現された美を堪能できない。すべては静かな小さなセットの中で作られたコマ撮アニメーションの技法による。技術・表現・モチーフすべてにおいて頂点に達した作品で川本作品のベストとして推す人も多い。欧米では、主人公の苦悩を、自ら持って生まれた美しさという原罪のせいと解釈する向きもある。

「劇の窮極の形の一つに仮面舞踊劇が存在する」

溝口健二監督の「雨月物語」は、劇中に流れている、能楽のメロディーや京マチ子演じる亡霊など、能を映画化したような非常に神秘的かつ幽玄で美しい演出がされている。黒澤明の「蜘蛛巣城」は、映画全体に能が取り入れられている。

アニメーションや映画の世界に描かれた「能」は、ロシアの映画監督エイゼンシュテ

インによって注目されていた。モンタージュ理論とその実践である『戦艦ポチョムキン』によって、世界の映画に大きな影響を与えている。その大胆なモンタージュ技法は、日本の古典よりの影響を、中でも極端な様式美が描かれた能の世界に、映画理論を書いた自書に紹介している。

日本文化に傾倒していたエイゼンシュテインは、歌舞伎や能といった様式美を作品に取り込んだ。それらによってモンタージュの技法が飛躍的に発展して、異なる映像を組み合わせることで見る者にある意味や感情を喚起させられる映画が作られた。

□　舞台という四角い、限られた枠の中に嵌め込まれるべき所作的表現である以上、その所作、扮装共に現実と同じものでは調和しないのが当然である。皿の絵はあくまで皿の絵式の非現実なものでなければならぬ。丸天井の絵はどこまでも丸天井式の夢幻的な構図着想でなければならぬ。その他、壁布の絵、衣裳の模様、人体の黥、その他何でも、芸術作品というものは、その盛り込まれる相手の形状、用途、環境、対象等の各条件によって、それらしいノンセンス味を加味して行かれねばならぬ。そこに現実としての虚偽があると同時に芸術としての真実が存在する。この意味で現実の断片を、そのまま舞台にはめ込むのは芸術上の大錯誤である。

舞台という特別な世界に嵌め込まれて、鑑賞さるべき所作芸術は、舞台という四角い箱に百パーセントまで調和する扮装と所作でなければならぬ。このために芝居に於て、俳優は、顔の化粧を強調し、動作を極度に突込み、表情を思い切り誇張する。舞台を区切る強い直線の力、フットライトの威力、音楽の波動、又は筋や言葉の緊張度等に圧倒されまい。これを支配して、これに調和して行こうとする。そうすると、その所作は次第に非現実なものになり、その扮装は自から舞台向きの特殊なものとなって来る。□
《夢野久作「能とは何か」》より

スペースシャトル「ディスカバリー」に搭乗した宇宙飛行士の野口聡一も、能の空間について宇宙遊泳に繋がる意識をかたっている。「ディスカバリー」飛行10日目に日本の子どもたちと交信した際、手元のマイクを飾った扇は、趣味の能で使われる「天女扇（てんにょせん）」だった。「船外活動（宇宙遊泳）の体の使い方に、能の舞を参考にした。『天女』は、アイリーン・コリンズ船長を表現したかった」

1991年に民間就職したころから、能に興味を持ち「祖父が京都で暮らし、先祖は京都で扇屋を営んでいた」という。宇宙飛行士になり、船外活動の訓練が始まると、能面をかぶって優雅に舞う能の身のこなしへ関心が移った。「重装備の宇宙服を着た船外活動では、体をいかに効率的に使うかが重要になる。宇宙服のヘルメットのように能面をかぶった視野の狭い中、四方に柱が立つ小さな舞台で滑らかに舞う能の動きが参考になっ

た」

国際宇宙ステーションの部品交換など飛行計約20時間に及ぶ３回の船外活動に取り組んだ作業を次々と成功させた裏側に、日本の伝統芸能が生かされたことを語っている。「約700年前に観阿弥・世阿弥が生んだ日本の心や芸術が、長い時間を経て、宇宙という舞台で生かされたと思う。あの扇は、その象徴だったのです」

才能、天性、効力、作用、内的潜在力、などという色々な意味が含まれている「能」の持った機能性が宇宙空間へ分野を超克して生きているのには感嘆する。

能の各種の表現には説明も及ばない全然無意味、不合理、不調和と見えるものがすくなくない。何の感激もないところに足拍子を踏む。美しい風景をあらわす場合に、観客に背中を向けて歩くという最も舞台効果の弱い表現をする。最も感激の深かるべきところを、一直線に通過する。そうかと思うと、格別大した意味のないところで技巧を凝らす。その無意味な変化は、全体の気分の上から出て来たものであったり、又は不合理、不調和に見えたものは、表現の裏の無表現でもって全体の緊張味を裏書きしたものであったりする。その無意味もしくは不調和な表現ほど能らしい、高潮した表現に見えてくることもある。

能楽は過去現在未来をつらぬいて、いかなる方面に進化して行きつつあるか。能楽の進化の中心を一直線にしていいあらわすと繁雑から単純へ……換言すれば外形的から内面的へ……客観から主観へ……写実から抽象へ……もう一つ突込んで云えば物質から精神へ……という事になる。「能」は進化の方法を非常な努力と自信の下に執って来た、世界に稀な芸術である。

注釈

エズラ・パウンド　Ezra Pound、（1885年10月30日－1972年11月1日）

詩人、音楽家、批評家で、T・S・エリオットと並んで20世紀初頭の詩におけるモダニズム運動の中心的人物。

プロヴァンス詩、漢詩、能、そして儒教の古典を、近代西洋の読者に紹介するのに力を尽した。ギリシャ・ラテンの古典を翻訳、擁護し、それらが、古典教育が衰退した時代における詩人にとり命脈を保つのを助けた。

エイゼンシュテイン　Sergei Mikhailovich Eisenstein（1898年１月10日－1948年２月11日）

ソビエト連邦の映画監督。戦艦ポチョムキン（1925年）ストライキ（1925年）10月（1928年）全線（1929年）アレクサンドル・ネフスキー（1938年）イワン雷帝・第１部（1944年）・第２部（1946年）・第３部（1946年）未完。メキシコ万歳（1979年）

川本喜八郎　Kihachiro Kawamoto（1925年１月11日－2010年８月23日）

人形制作・脚本・演出をつとめる。日本映画技術賞や、オタワ国際アニメーション映画祭

審査員特別賞、芸術祭優秀賞など多数の賞を獲得。中世を舞台にして人の執心をテーマにした３部作『鬼』『道成寺』『火宅』の最後の作品では、自分の進むべきテーマとモチーフを確立したと考えられ、人形の動き、立体表現でも大きな成果を得た。これらは不条理３部作と呼ばれることもある。

ドナルド・ローレンス・キーン　Donald Lawrence Keene（1922年６月18日－）

アメリカ系日本人の日本文学研究者、文芸評論家。コロンビア大学名誉教授。クラシック音楽オペラの愛好家でり、著書に『音盤風刺花伝』『音楽の出会いとよろこび』（音楽之友社刊）がある。交流のあった作家らは、三島由紀夫、安部公房、谷崎潤一郎、川端康成、吉田健一、石川淳、司馬遼太郎、篠田一士、大江健三郎など。

野口聡一　Soichi Noguchi（1965年４月15日－）

日本人宇宙飛行士。神奈川県横浜市出身。身長180cm。初飛行はSTS-107コロンビア号の事故後、NASA・スペースシャトル運航再開、最初の打ち上げとなった2005年７月26日のミッションSTS-114にミッション・スペシャリストとして乗船した時である。2009年12月20日にソユーズTMA-17に搭乗し、国際宇宙ステーション（ISS）に約５ヶ月間滞在。2010年６月２日地球に帰還した。

Soichi Noguchi（Astro_Soichi）- Twitterhttps://twitter.com/#!/Astro_Soichi